

# 淡路叶堂城跡（感応寺跡）出土瓦の再考

—戦国期天王寺瓦工の特質解明に向けて—

岡本 健

## はじめに

かなどじょうあと  
叶堂城跡は兵庫県南あわじ市松帆の三原川の河口付近に所在する、城跡と寺跡の複合遺跡である。後述するように、中世後期に存在した<sup>かんのうじ</sup>感応寺が慶長年間に他所へ移転し、豊臣政権によって石垣を伴う叶堂城が築城されたと考えられている。叶堂城の廃城後、感応寺が復歸したが、昭和58年（1983）に河川改修に伴う発掘調査が行われ、感応寺と叶堂城の遺構は消滅するに至った。

発掘調査において叶堂城築城以前に位置づけられる瓦窯が検出されており、中世感応寺の瓦を焼成した窯と考えられる。瓦窯などから大量に出土した瓦は、戦国期淡路における瓦生産の一端を知ることができる重要な資料である。さらに、「天王寺」銘を有する鬼瓦が出土していることから、研究史上では四天王寺系瓦工の瓦製作を示す事例として積極的に評価されてきた。当該資料は、四天王寺と瓦工とのかかわりを論じることができる可能性があるという意味でも重要な資料である。

ただし、叶堂城跡（感応寺跡）の瓦を扱った先行研究は、瓦当文様の分析にとどまっている。したがって、瓦の数量・出土状況・製作技法・使用痕跡などその他の諸属性に着眼すれば、考古資料としての可能性をより引き出すことができると考える。このような観点に基づき、本稿では叶堂城跡（感応寺跡）出土瓦を実見した成果をもとに当該資料を再評価し、戦国期における瓦生産の一端を明らかにする。

## 1、叶堂城跡（感応寺跡）の概要

以下、先学の知見をもとにして叶堂城跡（感応寺跡）の歴史についてまとめる。

中世感応寺の成立時期は明らかになっていない。安政4年（1857）成立の『味地草』では倭文の松尾山（感応寺山）から松帆に移転したとの説明がなされるが、それを裏付ける1次史料は存在しない。中世感応寺について記された1次史料は感応寺の梵鐘銘のみであり、「感応堂」の寺号とともに「文明七年」（1475）の記載がある〔兵庫県史編集専門委員会編1989〕。これは、文明7年の時点で感応寺が存在していたことを示唆する。ただし、この時点での所在地が倭文の松尾山か、それとも三原川河口の叶堂城跡かを明らかにすることはできない。

豊臣期における叶堂城の存在も、1次史料から裏付けることができない。『味地草』と文政8年（1825）成立の『淡路草』は、それぞれ豊臣家代官の石川紀伊守光遠（光春）が慶長6年（1601）に築城し、紀伊守の死後の慶長8年に廃城と記す。しかし、関ヶ原の戦いを機に淡路の豊臣家蔵入地は没収されており、その代官が関ヶ原の戦いの後に築城したとは考えにくい。すなわち、『淡路草』と『味地草』の年号の記載は誤っているとみるのが妥当である。したがって、石川紀伊守の築城は慶長5年以前に求めるべきである〔兵庫県教委1992〕。さらに、石垣の特徴が慶長期にあたるとする見解〔北垣1992〕



図1 叶堂城跡(感応寺跡)と関連遺跡位置図

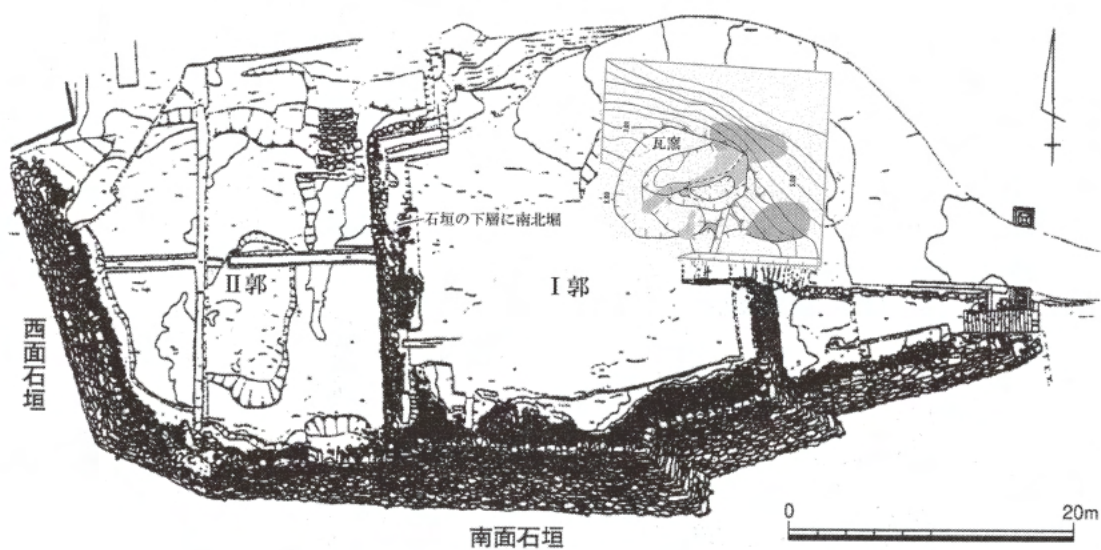


図2 叶堂城跡(感応寺跡)全体図

を踏まえれば、叶堂城の築城が慶長期に行われたことは間違いないだろう。

以上に述べたことからわかるように、中世感応寺の年代は文献史料からはほとんど明らかにすることができない。したがって、寺院の建物の存在を直接的に示す考古資料である瓦の年代は、感応寺の年代を特定するうえで大いに参考となるだろう。

昭和58年（1983）の発掘調査では、豊臣期の石垣の構造を確認するなどの成果があった。さらに、中世感応寺段階の瓦が多量に出土している。出土瓦の大半は、叶堂城築城以前に遡る瓦窯跡と堀跡からの出土である（図2）。また、遺物包含層出土や表採の資料をわずかに含む。以下、発掘調査報告書〔兵庫県教委1992〕の記述をもとに、瓦を多量に出土した遺構である瓦窯と堀について述べる。

#### (1) 瓦窯（図3）

瓦窯は叶堂城本丸の北東部斜面から3基検出されている。1号窯は灰原のみの検出ではあるが、2号窯と3号窯は窯体を検出している。窯の形式は窖窯である。瓦窯内出土の土器のうち、最も新しい資料は15世紀後半に該当することから、報文では瓦窯の構築は15世紀以降とする。ただし、土器の詳細な出土状況が記されていないことから窯そのものに関連する遺物とは限定できず、年代の参考とするにとどめるべきだろう。

特に、2号窯では焼成部床面において瓦群が出土している。その瓦群は、報文によれば「窯体の左側から右側に向かって倒れているが、下部に平瓦が小口積みに2段、上部に丸瓦が数段程度重なっている状態を看取することができる。また、瓦の大半は未成品ではなく完成品であることから、ほぼ焼成時の状態を示しているものと考えられる。」と記述される。すなわち、2号窯出土の瓦は、焼成後に何らかの原因で窯から取り出されず放置された状態をとどめているとの認識が示されている。ただし、2号窯出土の瓦を実見したところ、屋根に葺く際に角度を微調整するために工人が打ち欠いたと思われる痕跡を見出すことができる資料が一部存在した（図4）。すなわち、2号窯出土の瓦のすべてを焼成後に窯から取り出されず放置された瓦と見なすことはできず、建物の廃絶ののちに瓦窯が存在した場所に廃棄された瓦を一部含んでいるとみられる。

#### (2) 堀（図5）

堀は主郭石垣の下層から検出された。堀は主郭側から流入した焼土層と、瓦を多量に含む整地層によって埋没している。報文ではこの状況を、主郭側に存在した建物を焼却したのち、その瓦礫を堀に投げ込んだ状況を示すと推定している。ただし、焼土層と瓦を含む整地層は別の層である。さらに、出土した瓦を実見したところ、2次焼成により表面の炭素が消失して褐色に変色した瓦を見出すことはできなかった。したがって、瓦は火災を受けた状況を示していない。この状況から、火災と建物の破却とは別の出来事としてとらえるのが妥当であろう。

後述するように出土瓦は中世感応寺段階の瓦がほとんどだが、一部に豊臣期かそれ以降の瓦を含んでいる（図6）。うち図6-1は、羽毛状の文様であり、豊臣期大坂城〔大阪市文化財協会2002〕や湯山御殿〔神戸市教委2000〕など豊臣期の城郭で類例が見られることから、慶長期の叶堂城で使用さ

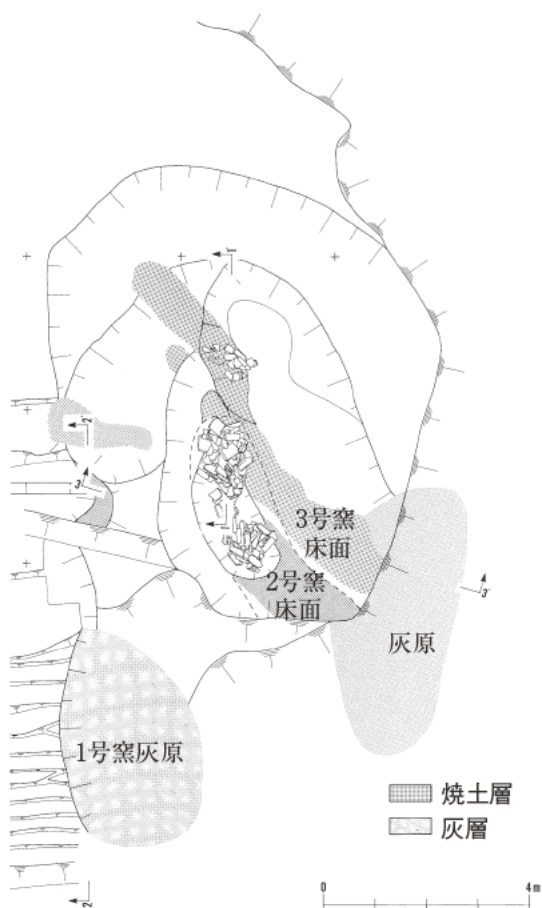


図3 瓦窯平面図

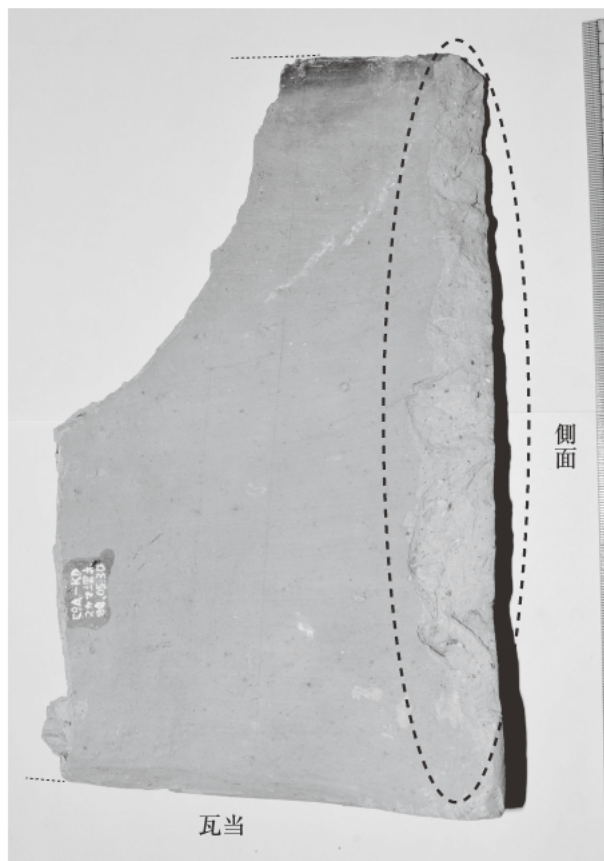
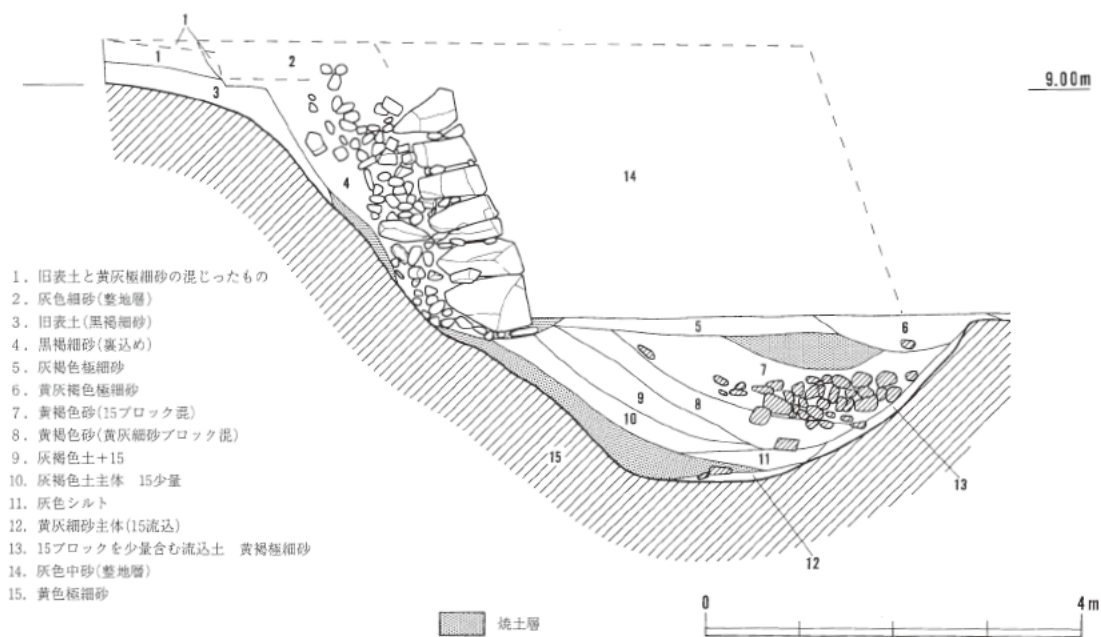


図4 軒平瓦の焼成後調整痕跡(軒平瓦D型式)  
兵庫県立考古博物館所蔵



1. 旧表土と黄灰極細砂の混じったもの
2. 灰色細砂(整地層)
3. 旧表土(黒褐細砂)
4. 黒褐細砂(裏込め)
5. 灰褐色極細砂
6. 黄灰褐色極細砂
7. 黄褐色砂(15ブロック混)
8. 黄褐色砂(黄灰細砂ブロック混)
9. 灰褐色土+15
10. 灰褐色土主体 15少量
11. 灰色シルト
12. 黄灰細砂主体(15流込)
13. 15ブロックを少量含む流込土 黄褐極細砂
14. 灰色中砂(整地層)
15. 黄色極細砂

図5 堀断面図

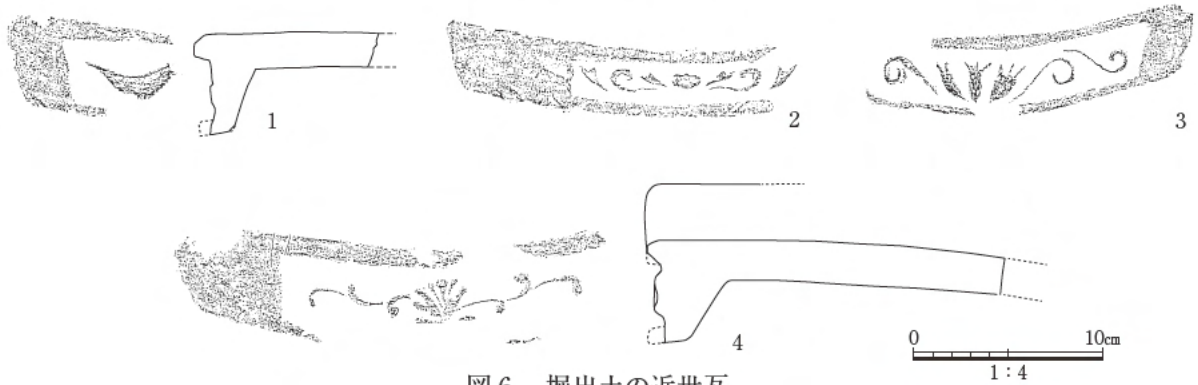


図6 堀出土の近世瓦



図7 田中幸夫氏が四天王寺系に比定した瓦当文様

種類	三巴文軒丸瓦	唐華文軒平瓦	波状文軒平瓦	
年代		有等中心飾	反転	同一方向・均整
室	1508? 淡路・叶堂城	1508? 叶堂城		1508? 叶堂城
	1528 濃飯・明王寺	1508? 叶堂城	淡路・蓮木八幡宮	摂津・西宮神社
町	1550? 摂津・四天王寺	1566 濃飯・鶴林寺	1564 四天王寺	
	1555? 阿波・友六寺	1557 淡路寺		1543 淡路・平等寺
代	155? 播磨・真陽寺	1566 濃飯・鶴林寺	1564 四天王寺	1555 友六寺
		1568~80 摂津・大坂城		1555 友六寺
豊臣前期		1568~80 初内・若江寺		1568~80 山城・勝蓮寺城
		大坂城	大坂城	大坂城
後期		大坂城		大坂城
1615		大坂城		大坂城

図8 黒田慶一氏による四天王寺系瓦編年

れた瓦に該当する可能性が指摘できる。従来、慶長期の叶堂城では瓦の使用は無いとされてきたが〔山上2017〕、今回慶長期の瓦に該当する可能性が高い資料を見出すことができたことは注目に値する。ただし、豊臣期の瓦に該当する瓦の量が極めて少ないことは注意すべきである。瓦の使用が限定的であった可能性や、城の破却の際に大部分の瓦が他所に持ち去られた可能性などが想定できよう。

堀埋土中に豊臣期かそれ以降の瓦が含まれる状況を素直に考えれば、堀の埋没時期は豊臣期以降ということになる。しかし、叶堂城の歴史を踏まえれば、石垣の構築時期は慶長5年以前と考えられ、この堀が豊臣期以降に埋没したとは考えにくい。報文において、石垣の観察から近世以降の石垣の改修の可能性が指摘されていることから、近世以降の石垣改修に伴って瓦が混入した可能性が想定できる。

## 2、叶堂城跡（感応寺跡）における瓦の研究史

以下、叶堂城跡（感応寺跡）の瓦をめぐる研究の動向について概観する。

田中幸夫氏は、戦国・織豊期における瓦工の出身地を播磨系・大和系・四天王寺系の三つに分類し、紀年銘資料を定点としてそれぞれの瓦工の手になる可能性が高い瓦の瓦当文様を整理した。田中氏が四天王寺系の瓦当文様に比定した文様を図7に示している。叶堂城跡出土瓦は四天王寺系に分類されている。そのうえで、瓦の分布や出土した銘文瓦を根拠に、播磨系と四天王寺系の瓦工は、大坂城・伏見城・名護屋城などの豊臣秀吉の築城に深くかかわったと想定している〔田中1995〕。

山崎信二氏は、田中氏による三分類を批判的に継承するとともに、水切り・横棧の形態や鬼瓦の表情など独自の視点を加えて考察している。さらに、叶堂城跡（感応寺跡）の瓦の年代を軒平瓦の瓦当文様の特徴から15世紀末から16世紀初としている〔山崎2008・2012〕。

黒田慶一氏は、四天王寺系の瓦当文様と認識した波状文・有萼花文などの文様について編年を行っている〔黒田1999〕（図8）。

以上に述べたことからわかるように、叶堂城跡の瓦は、四天王寺系瓦工による瓦製作の一事例として評価されてきたことがわかる。田中氏による四天王寺系瓦工の提唱を受けて、黒田氏・山崎氏により内容の深化が行われた。その分析は、ほとんど瓦当文様の特徴によっており、瓦の数量・出土状況・製作技法・使用痕跡などの諸属性に着眼した分析は本格的に行われるに至っていない。これらの情報は、瓦の年代や工人集団の系統、あるいは使用方法などの本質的な分析に役立つ可能性がある。そこで本稿では、これらの情報を踏まえて叶堂城跡（感応寺跡）の瓦を再考し、歴史的な位置づけを行う。

## 2、型式分類

ここでは、瓦窯で出土した8型式（軒丸瓦4型式、軒平瓦4型式）を中心に述べる。報文では、これらの軒瓦を軒丸瓦A～Dと軒平瓦A～Dに型式分類している。報文の型式分類は適切であり、本稿でもそれを踏襲する。以下、型式ごとに、瓦当文様などの特徴を資料調査の所見を踏まえて述べていく。また、先学の知見や筆者の知見を踏まえて他遺跡との同範・同文関係を整理する。

### (1) 軒丸瓦

軒丸瓦A型式（図9-1） 14点出土した。左巻き三巴文で、巴の尾部が圈線に接続する。珠文は20個を数える。瓦当部幅は約13cmを測る。

軒丸瓦B型式（図9-2） 12点出土した。左巻き三巴文で、巴の尾部が圈線に接続する。珠文は23個を数える。巴文の中心に、文様の割り付けの際のコンパス痕が観察できる。瓦当部幅は約14.5cmを測る。丸瓦部凹面に滑り止めを有する個体がある。

軒丸瓦C型式（図9-3） 5点出土した。左巻き三巴文で、巴の尾部が圈線に接続する。珠文は3個を単位に4回配置し、間に空白を設けている。瓦当部幅は約14cmを測る。

軒丸瓦D型式（図9-4） 2点出土した。左巻き三巴文で、圈線が無い。巴の尾部は互いに接続する。珠文は26個を数える。瓦当部幅は約13cmを測る。

### (2) 軒平瓦

軒平瓦A型式（図9-5） 8点出土した。中心飾は萼を有する三葉文で、脇飾に3回反転する唐草を配置する。瓦当部幅は約23cmを測る。平瓦部の凹面と凸面に滑り止めを有する個体が多い。成相寺（南あわじ市）で同文瓦（図10）が採集されている。

軒平瓦B型式（図9-6） 28点出土した。中心飾は萼を有する五葉文で、脇飾に3回反転する唐草を配置する。瓦当部幅は約24cmを測る。平瓦部の凹面と凸面に滑り止めを有する個体が多い。

軒平瓦C型式（図9-7） 13点出土した。中心飾は無く、左右にそれぞれ5回反転する唐草を配置する。向かって左端の唐草は、筈の切り縮めにより一部欠損している。瓦当部幅は約22cmを測る。平瓦部の凹面と凸面に滑り止めを有する個体が多い。長寿院（南あわじ市）・正貴寺跡（藍住町）・住吉神社（藍住町）で同文瓦（図10）が採集されている。

軒平瓦D型式（図9-8） 6点出土した。中心飾は「石」の字で、脇飾は5条程度の線を単位とする偏行する青海波文である。瓦当部幅は約23cmを測る。鳥飼八幡宮（洲本市）で同文瓦（図10）が採集されている〔兵庫県教委1992〕。

## 3、製作技法（図14）

以下、叶堂城跡（感応寺跡）出土瓦の製作技法について述べていく。その際、瓦の数量にも注目するが、当該期における瓦の出土点数は現状において非常に少ない。叶堂城跡は其中でも出土点数に比較的恵まれているとはいえ、属性分析に足る資料ではないとの指摘もあろう。そのような限界を認めつつ、今回は現状得られている資料をもとにして最も蓋然性の高い成果を提示する。したがって、今回の成果は資料数の増加に伴って修正されていくべきということを付言しておく。

### (1) 軒丸瓦製作技法

#### ①瓦当部と丸瓦部の接合技法

瓦当部に接合のためのカキメを施す資料と、瓦当部にカキメを施さない資料を見出すことができた

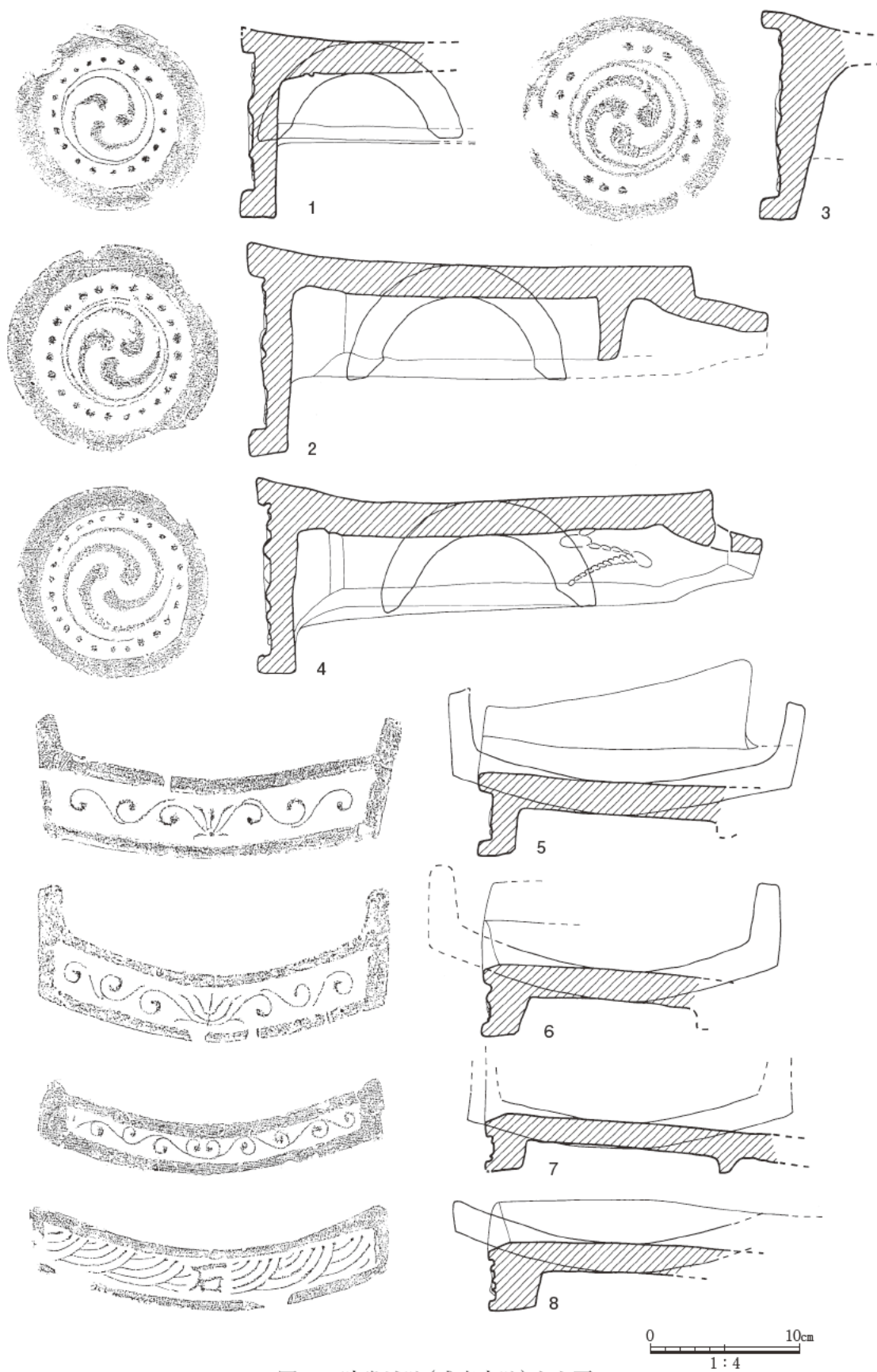


图9 叶堂城跡(感應寺跡)出土瓦

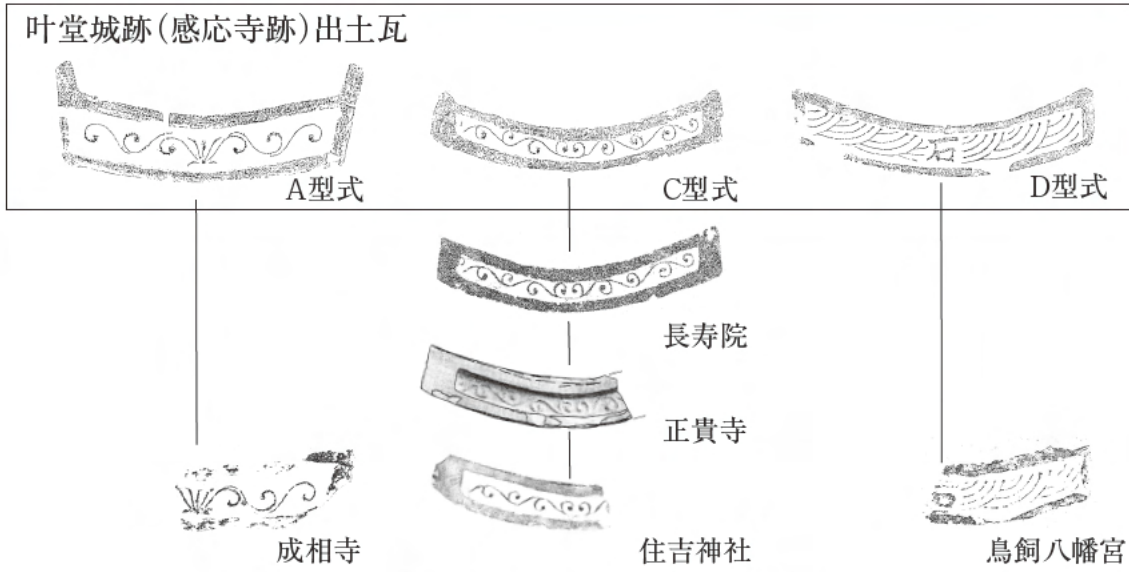


図10 叶堂城跡(感応寺跡)出土瓦を中心とする同文関係

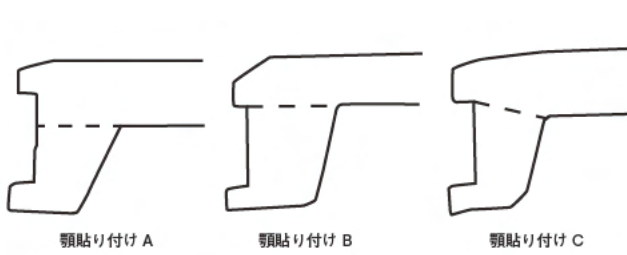


図11 軒平瓦の瓦当接合技法



図12 軒平瓦各部の面取り



図13 顎後縁面取り

(図14-1、注1)。これらの特徴を言語化すると、

- 瓦当部にカキメを施す場合がある型式…A型式
- 瓦当部にカキメを施さない型式…B型式、C型式
- 不明…D型式

完形のため接合部の観察が不可能であったD型式を除けば、瓦当接合技法と型式に相関関係を認めることができる。

## ②各部の面取り

### i、瓦当裏面下半部

瓦当裏面下半部に関しても、型式ごとの傾向を見出すことができた(図14-2)。

瓦当裏面下半部面取りをする(ことが多い)型式…A型式、D型式

瓦当裏面下半部面取りをしない型式…B型式、C型式

### ii、瓦当外縁下半部

瓦当外縁下半部についても、型式ごとの傾向を見出すことができた(図14-3)。

瓦当外縁下半部面取りをする型式…A型式、D型式

瓦当外縁下半部面取りをしない(ことが多い)型式…B型式、C型式

## (2) 軒平瓦製作技法

### ①瓦当部と平瓦部の接合方法

軒平瓦の瓦当接合技法については、芦田淳一氏が中世瓦について分類し[芦田1998]、さらに山口誠司氏が織豊期の資料について細分している[山口2017]。本稿では山口氏の分類(図11)に従い、瓦当成型法についてみていく。今回、叶堂城跡(感応寺跡)の軒平瓦を実見する中で、顎貼り付けAと顎貼り付けBの資料を見出すことができた。型式ごとにその傾向をまとめると図14-4のようになる。型式と瓦当接合技法との間に相関関係が認められ、それをまとめると以下のようになる。

顎貼り付けA…A型式、B型式、D型式

顎貼り付けB…C型式

### ②各部の面取り

以下、特徴的な面取り箇所について述べる。なお、瓦当上外区外縁については、すべての個体で面取りを行っていた。

#### i、顎後縁

顎後縁面取りについては、それを大和系瓦工の特徴とする研究が積み重ねられてきている[田中2004、山崎2008、山下2017・2019、岡田2019]。とりわけ山下大輝氏は、多聞城跡と置塩城跡の事例に関して、従来の文様論において大和系瓦工の製品とされてきた軒平瓦は顎後縁面取りが行われるということを数量データとして提示した。

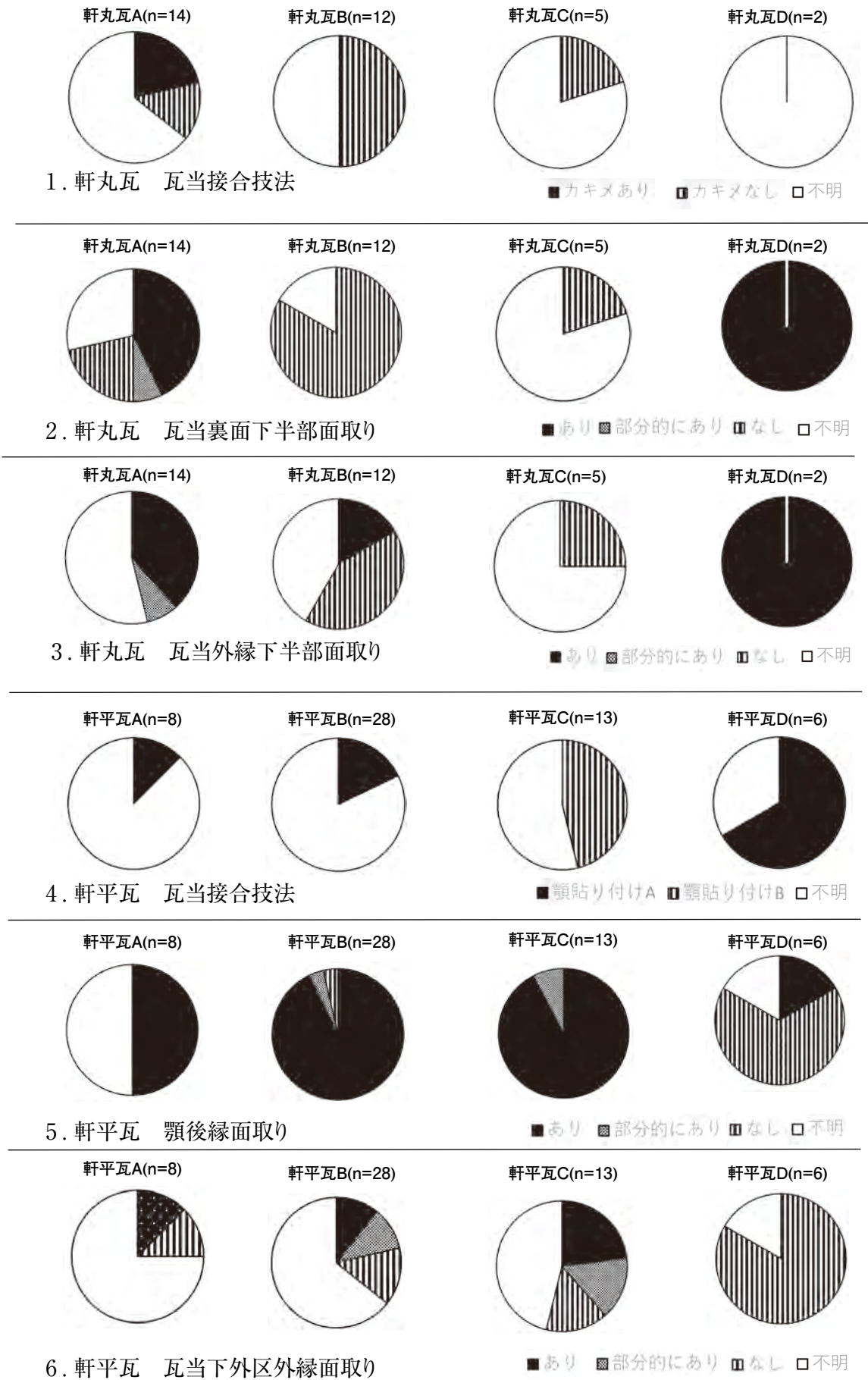


図14 各型式の傾向

今回、叶堂城跡（感応寺跡）の軒平瓦を実見するなかで、顎後縁面取りをする資料としない資料、さらに、部分的にする資料を見出すことができた（図14-5）。ごくわずかな例外を除いて型式ごとの傾向を認めることができ、それをまとめると以下ようになる。

顎後縁面取りを（部分的に）する型式…A型式、B型式、C型式

顎後縁面取りをしない（ことが多い）型式…D型式

#### ii、瓦当下外区外縁の面取り

瓦当下外区外縁については、面取りする資料・部分的に面取りする資料・面取りしない資料を見出すことができた（図14-6）。

瓦当下外区外縁を（部分的に）面取りすることがある型式…A型式、B型式、C型式

瓦当下外区外縁を全く面取りしない型式…D型式

以上に見てきた顎後縁・瓦当下外区外縁の面取りの有無の傾向から、面取りを丁寧に施す傾向があるA・B・Cと、面取りをしないDとに大別できる。したがって、型式と面取り箇所にある程度の相関関係を認める。

以上、軒平瓦と軒丸瓦について、型式ごとの製作技法を検討した。その結果、型式ごとに製作技法の特徴がみられることが明らかになった。この製作技法の差の評価が問題となる。次章では、本章の検討をもとに瓦群の年代と瓦工集団のありかたを考察する。

## 4、叶堂城跡（感応寺跡）出土瓦の年代と瓦工集団の考察

年代を推定するために重要な根拠となるのが、瓦当接合部に施すカキメである。以下、それぞれの属性についてみていく。軒平瓦・軒丸瓦ともに、カキメを施す資料と施さない資料が存在することは注目に値する。16世紀以降の瓦は接合部にカキメを施すのが一般的になる（芦田1998）ことを踏まえれば、叶堂城跡（感応寺跡）の資料はカキメ導入への移行期の様相を示すとの解釈ができるかもしれない。なお、明応年間（1492～1501）の基準資料である新宮山遺跡（大阪府交野市）の例では、すべての接合部にカキメを施している〔岡本2020〕。つまり、15世紀末から16世紀初めの時点ではすでにカキメは一般化している。したがって、叶堂城跡（感応寺跡）の資料はそれよりも遡るとみることができる。さらに、瓦窯の構築が15世紀後半以降にあたるという報告に従うならば、瓦の年代を15世紀後半に絞ることができる。ただし、瓦窯出土土器の詳しい出土状況が記されていないことから土器の年代と瓦窯の構築年代がリンクしない可能性もあり、その場合は15世紀後半をさかのぼりうるという事に留意すべきである。1章で述べた通り、使用痕跡が存在する資料が一部存在することから、瓦窯出土の瓦のすべてをこの瓦窯で焼成されたと断定することはできない。この瓦窯で焼成されたわけではない瓦がもし存在するとすれば、それがどの型式に当たるかということが問題となる。その可能性が最も高い型式として、軒平瓦D型式を挙げたい。軒平瓦D型式は、石の文字を中心飾とし、鳥飼八幡宮で同文瓦が採集されている。鳥飼八幡宮は、石清水八幡宮領鳥飼庄に勧請された石清水八幡宮の別宮（鳥飼別宮）に端を発する。したがって、瓦当文様の「石」の文字は、石清水八幡宮の頭文字と推測できる。軒平瓦D型式は、もとは鳥飼八幡宮のために生産された瓦ではなかったか。この推

測が正しいとすると、鳥飼八幡宮から感応寺（あるいは叶堂城）への瓦の移動を伴う建物の移築が想定できる。軒平瓦D型式はその他の軒平瓦3型式（A・B・C型式）と比較したときに顎後縁を面取りしないという特徴があり（次段落で詳述）、窯跡出土資料のなかに使用痕跡を持つ資料を含んでいる点でも他の3型式と異なっている。これらの観察所見から、軒平瓦D型式が鳥飼八幡宮からの転用瓦であり、その他の軒平瓦3型式が感応寺瓦窯で生産された感応寺専用瓦であった可能性が指摘できる。

また、軒平瓦のうち、A・B・Cの3型式は顎後縁を面取りする特徴を持つということは注目に値する。3章で述べた通り、顎後縁面取りは大和の瓦工の特徴とされていることから、大和と共通する特徴を持つ瓦といえる。さらに、平瓦部凸面の帯状横棧の特徴が法隆寺など大和の寺院と共通するとの指摘が山崎信二氏によってすでになされている。これを踏まえれば、大和の瓦工が出張製作を行ったか、あるいは、その影響を受けた瓦工により製作されたと推測できる。その一方で、同文瓦に注目すれば、淡路・阿波に分布する型式であり、この地域の在地瓦工の製作と推測できる。これらの条件から、①大和の瓦工が出張製作で一定の期間淡路・阿波で活動した、あるいは、②在地の瓦工が大和の瓦工の技術を学んで製作を行った、などの解釈が成り立ちうる。いずれにしても、大和の瓦工とのかわりを認めるべきである。軒平瓦A型式とB型式は黒田慶一氏によって、軒平瓦C型式は山崎信二氏によって、瓦当文様の類似性から四天王寺系瓦工の製作との評価がなされてきたが〔黒田1999、山崎2008〕、瓦当文様以外の属性から疑義を呈することができる。従来、瓦当文様の類似性を瓦工集団の特徴とする研究が積み重ねられてきたが、瓦工集団の他に時期的な流行や発注者の趣向などの可能性も等しく考慮すべきである。このように考えるならば、これらの型式では瓦工集団の趣向以外の要因によって瓦当文様が決定された可能性が推測されるのである。

一方、叶堂城跡（感応寺跡）では「大工天王寺小野光仙」と読み取れるヘラ書きを有する鬼瓦（図15）が積極的に評価されてきた経緯がある。ただし、鬼瓦を軒瓦の特徴と関連付けて論じるためには、鬼瓦と軒瓦の組み合わせを検討しなければならない。しかし、これらの鬼瓦は堀からの出土資料と表採資料で構成されており、胎土や焼成の特徴などにも顕著な差は無いことから、鬼瓦と軒瓦との組み合わせを厳密に検討することはできない。このような資料的限界を認めつつ、少なくとも天王寺にゆかりがあると称する瓦工が活動したことは事実であり、その意義は評価されなければならない。淡路・阿波を例に挙げれば、先行研究において銘文瓦の存在が指摘されている。具体的には、叶堂城跡（感応寺跡）の小野光仙のほか、河上神社・庄田八幡神社・平等寺の小野光弘（それぞれ1537年・1539年・1543年）、丈六寺の新一郎（1555年）が知られている〔田中1995・山崎2008〕。ここで、当地に瓦を供給した瓦工と天王寺（四天王寺）との関係が問題となる。瓦工と四天王寺との関係については大澤研一氏が文献史学の立場から興味深い指摘をしており、15世紀の段階で瓦工集団が座を組織して四天王寺に所属していたことが判明している〔大澤2010〕。それをもとに類推すれば、当地に瓦を供給した瓦工も四天王寺の瓦座を構成する瓦工集団であった可能性を想定しうる。

あるいは、淡路と四天王寺が地理的に離れていることを積極的に評価するならば、四天王寺との関係に否定的な解釈を与えることも可能である。その場合、「天王寺」を詐称した理由を求めなければならない。解釈の一つとして、「天王寺の瓦」がブランド化していたため、四天王寺と無関係であっ

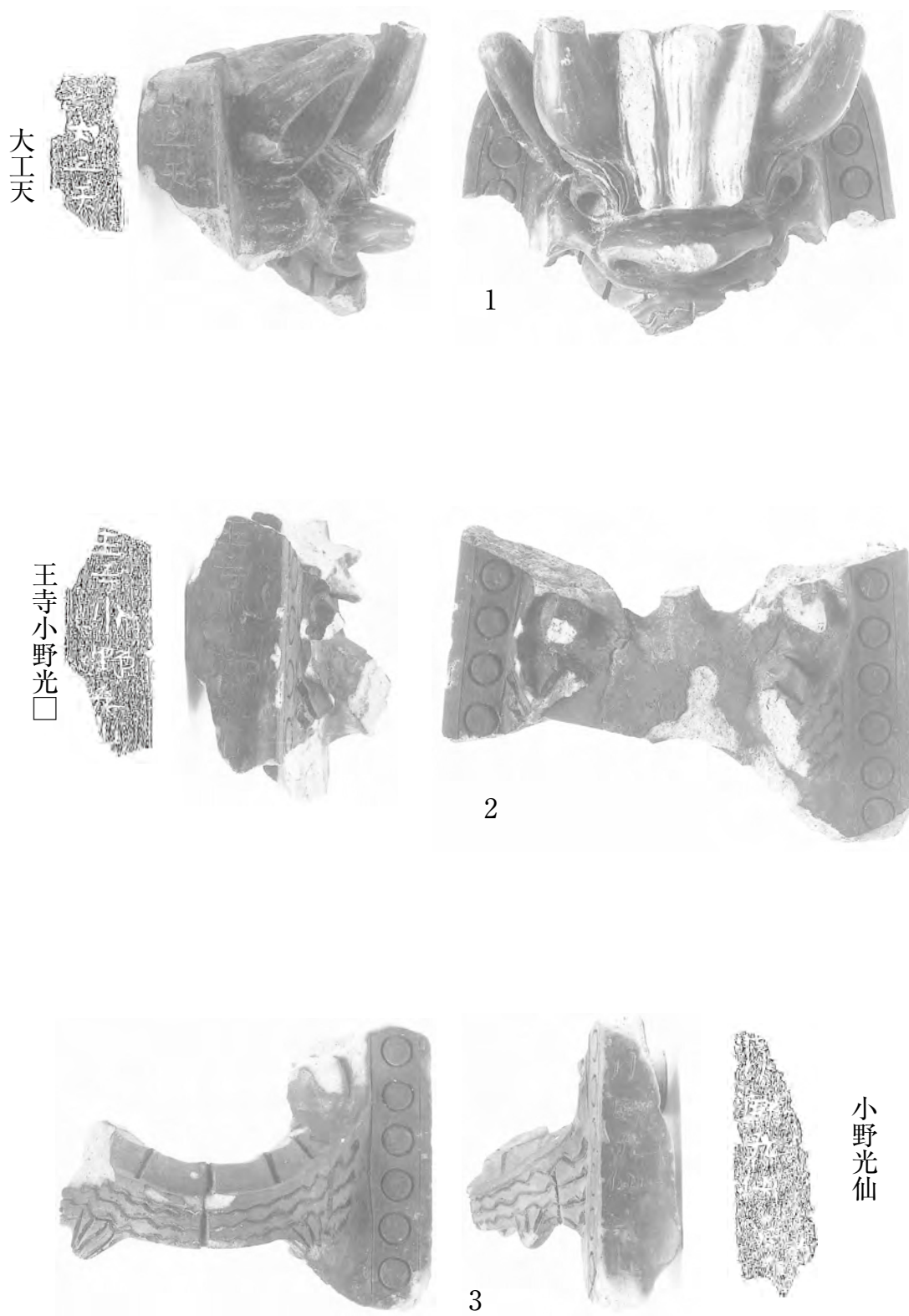


図15 叶堂城跡(感応寺跡)出土鬼瓦

でも積極的に「天王寺」の名称を使用した可能性を想定することができる。四天王寺との関係は判然としないものの、自称にせよ他称にせよ四天王寺とのつながりをアイデンティティとする瓦工が活動していたといえる。そのような意味で、四天王寺が瓦の生産・供給に一定の求心性を有していたことが指摘できよう。

## おわりに まとめと今後の課題

以上、叶堂城跡（感応寺跡）の出土瓦を数量・出土状況・製作技法・使用痕跡など瓦当文様以外の諸属性に即して分析した。その結果、型式ごとに製作技法の傾向の差を看取した。さらに、従来は鬼瓦の銘文と瓦当文様の特徵から「四天王寺系」と一括して理解されていた瓦群の一部に大和の瓦工の影響を認めた。瓦当文様を決定する要因として瓦工の趣向以外に時期的な流行や施主の意向などが想定されることを指摘した。「天王寺」とヘラ書きする瓦工と四天王寺とのかかわりを具体的に明らかにすることはできないが、当時の造瓦活動における四天王寺の求心性を示唆すると考えた。

中世の四天王寺門前町に関する考古学的研究は、発掘調査で検出された堀や建物などの遺構から都市の景観を復元する方向性を中心に進展している〔市川2014・松尾2020など〕。その一方で、中世都市は多種の職人を包摂しており、その職人が生産したモノを手掛かりに職人を研究し、都市を論じるという視座も成り立つ。とりわけ四天王寺門前町は、瓦の生産に関して求心性を有していたことが明らかである。したがって、遺物論としての瓦研究から、中世都市四天王寺門前町の特質にアプローチすることが可能である。

中世・近世の大坂を研究する立場にあっても、瓦研究は重要なテーマである。戦国期における四天王寺の瓦生産があり、織豊期における瓦工集団の再編を経て、近世における御用瓦師寺島家の成立に至る。各時代における瓦工の活動、権力者とのかかわりなど、明らかになっていない点が多い。考古学のみならず文献史学・歴史地理学などの近接諸分野と共同でこのような論点にアプローチしていく必要がある。今後の課題としたい。

## 謝辞

本稿執筆のための資料調査に際し、兵庫県立考古博物館の菱田淳子氏のご協力を得た。また、城郭談話会の諸氏から有益な助言を得た。記して感謝申し上げます。

注1：芦田淳一氏は、軒丸瓦の瓦当接合技法について、①瓦当裏面の丸瓦接合部分に軽くナデ調整を行うもの、②瓦当裏面、丸瓦に何の調整も加えないもの、③丸瓦の広端面にカキメをいれるもの、④瓦当裏面の丸瓦接合部分と丸瓦の広端面にカキメをいれるもの、⑤瓦当裏面の丸瓦接合部分と丸瓦の広端面および凹面広端にカキメをいれるものに分類した。今回検討した資料では、芦田氏の分類に耐えるほど破断面を詳細に観察できる資料が存在しなかったため、カキメの有無で大まかに分類した。

## 参考文献

- 藍住町教育委員会2014『正貴寺跡発掘調査概要報告書—第1次・第2次調査—』
- 芦田淳一1998「総持寺出土の中世瓦—瓦当成型法を中心に」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』Ⅰ、pp.1-34
- 市川 創2014「四天王寺周辺の堀状遺構」『関西近世考古学研究』22、関西近世考古学研究会、pp.15-28
- 大阪市文化財協会2002『大坂城跡』Ⅵ
- 大澤研一2010「摂津国四天王寺の職人」『中世東アジアにおける交流と移転—モデル、人、技術』国立歴史民俗博物館、pp.55-64
- 岡田雅彦2019「大和の城郭出土瓦の様相について」『織豊城郭』第19号、織豊期城郭研究会、pp.25-48
- 岡本 健2020「新宮山遺跡出土の瓦について」『交野市文化財だより』第31号、交野市教育委員会、pp.14-15
- 岡本 稔1964「淡路古瓦集成」『淡路地方史研究会会誌』2、pp.36-48
- 北垣聰一郎 1992「叶堂城の石垣遺構について」『叶堂城跡 三原川激甚災害対策特別事業に伴う発掘調査報告書』兵庫県教育委員会、pp.93-100
- 黒田慶一1999「OS96-32次調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』1996年度、大阪市文化財協会、pp.85-106
- 神戸市教育委員会2000『ゆの山御てん 有馬温泉・湯山遺跡発掘調査の記録』
- 須藤 宏2018「114 叶堂城」『続 織豊期城郭瓦研究の新視点』織豊期城郭研究会、pp.454-457
- 田中幸夫1995「播磨を通過した四天王寺系工人」『織豊城郭』第2号、織豊期城郭研究会、pp.1-14
- 田中幸夫2004『播磨の中世瓦』私家版
- 浪速勇次郎1973『阿波国古瓦拓本集』同書刊行会
- 兵庫県史編集専門委員会編1989『兵庫県史』史料編中世4
- 兵庫県教育委員会1992『叶堂城跡 三原川激甚災害対策特別事業に伴う発掘調査報告書』
- 松尾信裕2020「中世の四天王寺旧境内遺跡」『大阪歴史博物館研究紀要』第18号、pp.37-52
- 山上雅弘2017「叶堂城」村田修三監修・城郭談話会編『織豊系城郭とは何か』サンライズ出版、pp.364-365
- 山口誠司2017「製作技法からみた織豊期城郭の瓦—伏見城豊後橋北詰出土資料を中心に—」『中世城郭研究』第31号、中世城郭研究会、pp.248-257
- 山崎信二2008『近世瓦の研究』同成社
- 山崎信二2012『瓦が語る日本史』吉川弘文館
- 山下大輝2017「中世末大和の在り地工人による瓦生産」『奈良歴史研究』第88号、奈良歴史学会、pp.1-19
- 山下大輝2019「姫路系瓦工人の製作技法的指標の特定にむけて—置塩城跡出土軒瓦の検討」『歴史と神戸』58-2、神戸史学会、pp.1-12

## 図版出典

- 図1：地理院地図をもとに筆者作成。
- 図2：須藤2018より引用。
- 図3：兵庫県教委1992に加筆。
- 図4：筆者撮影写真に加筆。掲載にあたって兵庫県立考古博物館の許可を得た。
- 図5：兵庫県教委1992より引用。
- 図6：1の断面図のみ筆者実測。その他は兵庫県教委1992より再トレースし引用。
- 図7：田中1995をもとに作成。
- 図8：黒田1999より引用。
- 図9：兵庫県教委1992より引用。
- 図10：叶堂城跡（感応寺跡）は兵庫県教委1992、成相寺と鳥飼八幡宮は岡本1964、長寿院は山崎2008、正貴寺跡は藍住町教委2014、住吉神社は浪速1973よりそれぞれ引用。

図11：山口2017を再トレース。

図12：筆者作成。

図13：筆者撮影写真に加筆。

図14：筆者作成。

図15：兵庫県教委1992に加筆。

#### 追記

本稿の脱稿後、山下大輝2020「中世末期播磨・畿内における瓦工人系統再考」『考古学研究』第67巻第2号、考古学研究会、pp.36-55に接した。そのなかで山下氏は「叶堂城跡（兵庫県南あわじ市）下層瓦窯資料の引掛け軒平瓦横棧形態からは大和系の特徴を示すと指摘される（山崎2008,pp.223-225）。今回五弁文Bbbと大和系統の指標となる製作技術的属性が対応する個体が確認されたことにより、四天王寺系との評価には修正が必要である。」と述べる。叶堂城跡の資料に関して、山下氏の論は本稿の結論の一部と一致しており、首肯できる。

